諫早湾閉め切りから 20 年，有明海の現状と未来を考える (2)

Twenty years after the shut-off of Isahaya Bay, the present status and future of Ariake Sea (2)

日本ベントス学会自然環境保全委員会

佐藤慎一^{1)*}・折田 亮²⁾・山川彩子³⁾・阿部博和⁴⁾・松政正俊⁴⁾

¹⁾ 静岡大学理学部地球科学科. 〒422-8529 静岡市駿河区大谷 836

²⁾ 佐賀大学農学部生物資源科学科. 〒840-8502 佐賀県佐賀市本庄町 1

³⁾ 沖縄国際大学地域環境政策学科. 〒901-2701 沖縄県宜野湾市宜野湾 2-6-1

⁴⁾ 岩手医科大学全学教育推進機構・教養教育センター. 〒028-3694 岩手県紫波郡矢巾町医大通り 1-1-1

The Nature Conservation Committee, Japanese Association of Benthology—
Shin'ichi SATO^{1)*}, Ryo ORITA²⁾, Ayako YAMAKAWA³⁾, Hirokazu ABE⁴⁾ and
Masatoshi MATSUMASA⁴⁾

¹⁾ Institute of Geosciences, Shizuoka University, 836 Oya, Shizuoka 422-8529, Japan

²⁾ Faculty of Agriculture, Saga University, Saga 840-8502, Japan

³⁾ Okinawa International University, 2-6-1 Ginowan, Ginowan City, Okinawa 901-2701, Japan

⁴⁾ Department of Biology, Center for Liberal Arts & Sciences, Iwate Medical University, Idaidori 1-1-1, Yahaba-cho, Shiwa-gun, Iwate 028-3694, Japan

日本ベントス学会自然環境保全委員会は、水域の環境問題にかかわる科学的な論議と情報を会員ならびに社会に提供し、環境保全に関する研究と議論の促進を図るために必要な事業を行うことを理念として、1999 年 4 月に発足した(向井 2000, 逸見 2001)。その活動内容は、学会大会開催に合わせて環境問題関係の研究集会を開き学会和文誌などに発表することや、必要に応じて開発事業の環境影響評価書に対する意見書や声明の発表を行うことなどである(向井 2000)。

本委員会発足のきっかけとなった 1997 年の諫早湾干拓事業をめぐる問題に関しては、これまでに 6 回の関連シンポジウムの開催と 4 回の要望書提出が行なわれている(佐藤 2012a, b, 2013, 2015)。最近では、2017 年 9 月に滋賀県立大学で自由集会「渚の自然環境をめぐる諸問題 III ～自然環境保全委員会企画自由集会：諫早湾閉め切りから 20 年，有明海の現状と未来を考える」を開催し、それらに関する報告記事と特集を日本ベントス学会誌 73 巻 2 号と 74 巻 1 号にそれぞれ発表した(佐藤ら 2019a, b)。

本号(74 巻 2 号)では、前号に引き続き有明海の現状報告と今後の対策を検討する特集第 2 弾として、新たに 3 編の原著論文・総説を掲載する。首藤らは、諫早湾潮受け堤防閉め切り後 5 年間の有明海中央部における底生端脚類群集の変化について紹介する。次に、近藤らが 1998 年か

ら 2018 年までに諫早湾干拓調整池から得られたユスリカ類の群集組成と幼虫密度の経年変化を、環境要因ならびに成虫の発生動向とともに解析した成果を報告する。さらに、佐藤らは諫早湾干拓調整池における水質・底質・大型底生動物群集の経年変化に関する研究成果を包括的に紹介することで、諫早湾の潮止め後に干拓調整池内で何が起こったのかを考察し、今後に常時開門した際に生じる現象を予測する。

これらの特集論文は、今後の要望書提出時などにおいて、科学的根拠として活用されることが期待できる。特に、2020 年 2 月 21 日から福岡高裁で行われる諫早湾開門に関する差し戻し審では、最高裁判所からの補足意見として、2010 年の確定判決後の状況の変化を踏まえて審理することが高裁に対して要求されている。前号と今号に掲載した特集論文の多くは、2010 年の確定判決以降も有明海の環境や底生動物群集に改善の兆しは見られず、むしろ深刻化していることを科学的データとして示しており、それらに大きな好転が見られたのは堤防閉め切り後 22 年間で唯一 2002 年(短期開門直後)のみであったことを指摘している。これらの科学的事実が福岡高裁での差し戻し審において検討されることが望まれる。

なお、今号の特集論文掲載においても、ベントス学会誌編集委員会の皆様に多大なご尽力をいただきました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

* Corresponding author
sato.shinichi.c@shizuoka.ac.jp

引用文献

- 逸見泰久 2001. 特集 1 渚の危機—瀬戸内海・九州・沖縄の状況—. 日本ベントス学会誌, 56: 18–20.
- 向井 宏 2000. 自然環境保全委員会の発足. 日本ベントス学会誌, 55: 45–46.
- 佐藤正典 2012a. 「有明海の生物多様性保全のための 4 学会合同シンポジウム：有明海の特異な生物相—諫早湾の環境復元の意義—」の報告. 日本ベントス学会誌, 66: 102–116.
- 佐藤正典 2012b. 「諫早湾潮受け堤防内に海水を導入する「排水門開放」の早期実施を求める要望書」の提出. 日本ベントス学会誌, 67: 33–34.
- 佐藤正典 2013. 日本ベントス学会公開シンポジウム「有明海・諫早湾—日本初の大規模な環境復元の意義—」の報告. 日本ベントス学会誌, 67: 97–100.
- 佐藤正典 2015. 日本ベントス学会自然環境保全委員会から提出された 3 つの要望書. 日本ベントス学会誌, 70: 21–29.
- 佐藤慎一・木村妙子・金谷 弦・松政正俊 2019a. 渚の自然環境をめぐる諸問題 III～自然環境保全委員会企画自由集会：諫早湾閉め切りから 20 年，有明海の現状と未来を考える. 日本ベントス学会誌, 73: 119–120.
- 佐藤慎一・折田 亮・山川彩子・阿部博和・松政正俊 2019b. 特集 諫早湾閉め切りから 20 年，有明海の現状と未来を考える. 日本ベントス学会誌, 74: 41–42.